



諏訪湖通信83号

令和7年5月20日号 発行: 諏訪湖創生ビジョン推進会議



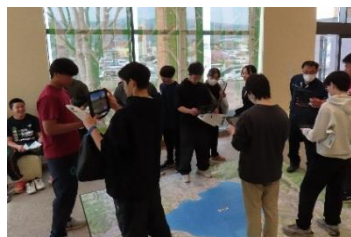
岡谷工業高環境化学科3年生が 諏訪湖環境研究センターを見学しました

岡谷工業高校環境化学科はこれまで、諏訪湖の貧酸素問題やマイクロプラスチック問題等に関する課題研究に取り組んでおり、今年度は3年生15名全員が、課題研究のテーマとして諏訪湖の水質や生態系に焦点をあて、取り組んでいくとのこと。その導入学習として、4月18日(金)に諏訪湖環境研究センターの常設展示及び2階・3階の検査室を見学しました。

はじめに常設展示の見学をし、諏訪湖のなりたちや現在の課題など、諏訪湖を研究するうえで基礎となる内容を学習しました。続いて、通常は一般に公開していない2階・3階の検査室へ。研究員による分析機器の説明や実際の作業の様子を見学し、とりわけ、有機検査室に設置されている局所ドラフトや底泥研究室の底泥酸素消費速度を測定する装置に興味を持った様子でした。

生徒たちはこの日のセンター見学を経て、各自が取り組む研究テーマを選定し、来年1月の研究成果発表会に向け、課題研究を進めるとのこと。来年の成果発表で、どんな研究結果が出てくるかとても楽しみです。

今後は、センターとの共同研究につながることも期待します。



(ホワイエ展示見学の様子)



(機器室・研究室見学の様子)

諏訪湖環境研究センターが調査船を導入しました

諏訪湖環境研究センターは、このほど諏訪湖の調査研究をより効率的に行うため、自前の調査船を導入しました。船の名前は、「かんけん1号」です。諏訪湖環境研究センターの「環」と「研」から命名しました。

定員は12名と大きな和船ですが、諏訪湖の採水・採泥、水草調査においては、甲板を広く使えて、作業効率が上がります。

現在、センター職員には4名の船舶免許所有者がいますが、船の運転は皆、初心者ですので、運転練習の毎日です。

今後、湖岸や湖上でセンターの調査船を見つけたら、やさしく見守っていただけたら幸いです。



(調査船「かんけん1号」係留場所は東赤砂船着場です)



(研究員による操縦の様子)

波返しコンクリート護岸が生態系に配慮した着(なぎさ)に至った経緯

昭和42(1967)年諏訪湖周護岸工事開始

諏訪の周囲16kmの整備がほぼ終わったのは平成4年でした。多くの方から自然に配慮が足りないとの指摘を受けました。

○護岸の構造について

①堤防天端幅/ 計画高水流量を定めない湖沼の天端幅として基本計画幅3m、三面張以外は+1m、波浪高+1m、背後地が市街地 +1mの計3mを加えて堤防幅は6mとしました。

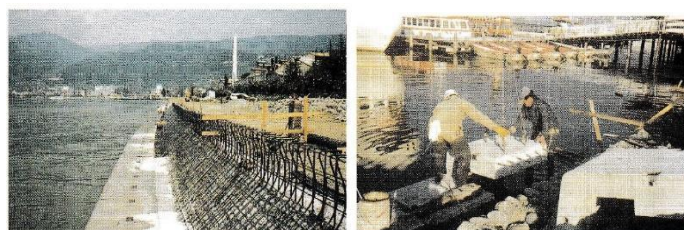
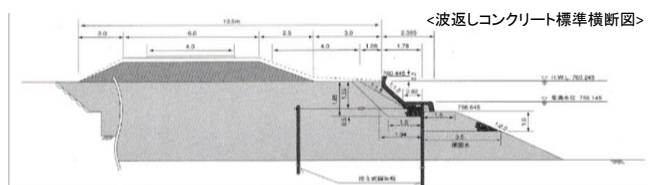
②堤防勾配/ 湖水の浸透に対して安定な2割以上。

③余裕高/ 波高の解析にはSMB法が広く使用されています。SMB法とは、風速、吹走距離、吹続時間の3つの要素から波高を算出します。

計算によると0.97mとなりますので1mとしました。

④小段/ 下記理由により幅3mを確保しました。

洪水時による洗堀防止。浸透水に対する安全確保。水防作業の時の作業車の通行。



波返しコンクリート施工写真

護岸型式別整備延長					
護岸型式	波返しCO	低水式護岸	階段式護岸	自然石護岸	遠浅護岸
延長 (m)	11,115	1,400	523	1,658	555
合計	15,251				

平成5(1993)年国が定めた多目的型川づくり実施要領を受けて水辺整備の先行工事を開始

諏訪湖水辺整備の基本的な考え方

湖畔を一律に再改修するのではなく、沿岸地域と背後地の特性に配慮し、地域住民の要望にも配慮し、8ブロックに分けて、その地域の特性に合わせた再改修計画を実施しました。

・湖岸の陸域だけでなく、湖側の水域にも配慮した設計としました。

・既存のコンクリート護岸は覆土し、陸域と水域の連続性を再生しました。

・水際の水生植物について

抽水植物に関してはマコモを主に植栽しますが、沈水植物に関しては埋伏種子、根系による自然再生を基本としました。 →次号に続く



先行工事実施位置図

諏訪湖創生ビジョン推進会議は、「人と生き物が共存し誰もが訪れたい諏訪湖」の実現を目指し取り組みます。
事務局: 諏訪地域振興局企画振興課 TEL: 0266-57-2901